2021(令和 3)年 2 月 14 日

論 文 審 査 報 告 書

審査委員
主　査　Ｃ．Ｓ．ピュー
副　査　藤　野　功　一
副　査　宮　本　敬　子

学位申請者　：　ロバート・プレスラー (Robert Preslar)

論 文 題 目　：　WEBS OF SIGNIFICATION IN HITCHCOCK'S ADAPTATIONS: AN ANALYSIS OF INTERCONNECTING TROPES IN *THE LODGER* AND *VERTIGO* (ヒッチコックのアダブテーションにおける意味作用の網の目 ―『下宿人』と『めまい』における連鎖的比喩表現の分析)

審査の経緯

ロバート・プレスラー氏の博士論文は、2020 年 10 月 13 日に事前審査論文が提出され、学内の事前審査委員会の指導に基づくリライトを経て、2020 年 12 月 4 日に受理された。その後 3 名の審査委員による審査を経て、2021 年 2 月 9 日の最終試験(公開)をもって審査を終了した。

論文の概要

ロバート・プレスラー氏の論文は、ヒッチコックの二つの映画、一つは初期のサイレント映画『下宿人』(1927)、もう一つは後期の傑作『めまい』(1959)を取り上げ、それぞれの原作となったテキストとの関係を詳細に考察したものである。これらの映画において原作となったテキストがどのように翻案されたかがこまかく検証されると同時に、その他の多くのヒッチコックの映画の様々な場面にまでその意味作用を拡散させてゆく比喩的技法(tropes) やテーマ (motifs) のネットワークの重要な部分が特に詳しく分析されている。近年の翻案理論（adaptation theory）、映画分析、ヒッチコック映画批評、その他の分析手法の成果を取り入れつつ、ヒッチコック映画の意味作用の網の目を辿り、その意味作用が具象化や登場人物のアイデンティティ、またその他のテーマにどのように作用し、ヒッチコック特有の表現となったのかを探っている。以下、それぞれの章の概要を述べる。

まず、序章においては、二つの映画についての歴史的文脈が検証され、先行研究の概観を行ったのち、この二つの映画が原作をどのように翻案したかについて論じた数少ないいくつかの論文が取り上げられている。次に、適用可能な映画理論および文学理論について概観した後、『下宿人』と『めまい』という二作品において、なぜ近年の新たなオリジナル映像の復元と復元版の再発売が非常に重要であったかが論じられ、さらに、一方が初期のサイレント映画、もう一方が第二次世界大戦後のハリウッド作品という、一見すると全く異なる二つの映画を比較研究することがなぜ重要であるかが説明される。本論文ではカメラ、登場人物の身体、そして観客という三つの要素の関係性が細かく議論されるが、その目的は、特定の画面配置、窃視的なカメラワーク、登場人物の独特のアイデンティティ、あるいは徹底した主観性といった要素が、ヒッチコックの生涯にわたる映画製作を貫く特徴となっていることを明らかにするためである。

次に、第 1 章「ヒッチコックの『下宿人』の原作翻案における具象的表現、登場人物、そして認識」では、原作のラウンズによる推理小説を映画に翻案するにあたって、そのプロットにどのような数々にわたる変更が加えられたかが詳細に検証される。しかしながら、原作の推理小説においても、また、映画においても、特に女性の登場人物は事件について何らかの認識を得るものとして登場すると同時に、作品全体が言わんとしていることをその身体全体で示したり、あるいはロンドンの社会的／地理的状況にその象徴的意味を刻み込むための手段として扱われたりしていることが論じられる。あたかも 31 年後に『めまい』においてヒッチコックがフィルムに刻み込むことになる場面を予言するかのように、『下宿人』においても女性のセクシュアリティは（少なくともその一部分が）商品化され、あたかもモンタージュのように人工的に合成された作り物として提示され、それを手がかりに過去の出来事を探ろうとしても、それが成功するかどうかはおぼつかないことが示されるのである。

第 2 章「ヒッチコックの『めまい』における語りの反復と原作の翻案」は、ボワロー=ナルスジャックによる推理小説の原作とヒッチコックの映画のプロットとテーマの複数の相似点を丹念に比較し、その意味作用の構造には決定的な違いがあることを明らかにする。『めまい』における原作の翻案は、『下宿人』に比べてより忠実に行われているが、かえってその忠実な翻案によってヒッチコックの意図がさらに明確に伝わるようになっているのである。ボワロー=ナルスジャックの『 死者のよみがえり(*D'entre les morts*)』とヒッチコックの『めまい』の主人公はどちらもあやうく死にそうになるが、ヒッチコックはその主人公の経験からくる高所恐怖症をうまく用いて、主人公の死への恐怖と同時に、彼の死への欲望、過去の再現への欲望、そして、過去の語りをそのまま現実に再現することの危険を同時に示すことに成功している。

第 1 章と第 2 章の詳細な検証の結果、原作の小説と映画との間にばかりでなく、『下宿人』と『めまい』との間の驚くべき類似性も明らかになる。映画同士の比較分析と、ヒッチコック映画の原作からの翻案の比較分析を、その比喩的技法(tropes)やテーマ(motifs)、あるいはその登場人物の身体の具現化(embodiment)の問題を中心にして考察する方法により、原作となった作品と映画作品との間に張り巡らされた意味作用の網の目を精査することが可能であると提示される。この方法をもちいて、登場人物の身体によって具現化される役割と人物の地理的な移動がどのようにして悲劇的な語りの具現化の予兆を感じさせるか、あるいは、身体、オブジェ、舞台設定がどのように意味作用のつながりを作り出すか、などが特に焦点を当てて研究されている。

『下宿人』と『めまい』の両方の作品において、死者を再び現世に蘇らせようとする欲望は、すなわち過去の語りを現代の文脈の中に蘇らせることを必然的に意味することになると思われるが、実際のところは、これら二つの作品においては、死者を蘇らせようとする行為は、過去の語りが生み出す意味の不確定性をより一層強調することに終わっている。これら二つの映画の間の明瞭な共通点、すなわち、死んだ女性を生き返らせようとする欲望を詳細

にたどることによって、過去に向けた悔恨や偽物ではない本物の生き返った女性を求める気持ちなどの主題は、初期の映画でもすでにはっきりと示されており、その主題がさらに大掛かりなものとなって、後期の作品において反復されていることがわかる。複数のヒッチコックの映画作品が、原作となった作品と様々な意味のつながりを持ちつつ、それらを様々な文脈の中で再解釈してゆくのを理解することによって、あらゆるヒッチコックの映画作品に張り巡らされた意味作用の網の目の重要性があらわになる。こうして、本論文の詳細な分析は、ヒッチコック映画の原作からの翻案という重要な意味作用のネットワークの研究が将来さらに行われる際に、どのように発展してゆくかを明確に示すに十分適切な研究方法を確立していると言えよう。

論文の評価

ロバート・プレスラー氏の論文は、アルフレッド・ヒッチコック映画二作品の原作翻案について、効果的に構成され、説得力のある議論と、徹底したリサーチが行われ、さらに注意深く記述された研究である。さらに、この研究領域における将来的な研究に向けて、深い洞察に満ちた生産的な研究方法を確立している。ヒッチコック二作品についての解釈は詳細にわたり、また、その内容においても、再生、具現化、地理空間の設定、反復されるモチーフによる意味作用等について、非常に刺激的な考察が行なわれており、博士論文として高い水準に達していることは明らかである。

しかしながら、本論文には、さらなる改訂を求めなければならない部分があることも事実である。全体としての議論はよく書けているものの、訂正すべき書き間違いや分かりにくい表現がところどころにみられ、また、その専門用語を使った議論は時にあまりに抽象的になる傾向がある。この論文では、映画とその原作それぞれについての考察が広範囲にわたって行われるが、その一方で、重要なキーワードの概念が明確に定義されることなく使われるなど、必要とされるべき部分が欠けていたり、あるいは、映画と原作との関係についての重要と思われる部分の説明があまりに短いなどの、バランスの悪さが見られる。また、ヒッチコックの映画作品の脚本家について詳しい説明がないが、これらの要素の説明をして、少なくとも、映像作家としてのヒッチコックの名声が、いかに彼らのような脚本家の貢献を無視させるほどの影響力を持ったかを説明すべきであっただろう。また、ヒッチコック映画の女性登場人物たちの画面上における多様で曖昧な意味作用は徹底的に分析され、その役割の重要性が強調されているが、意味作用の網目の中に当然組み入れられるべき女性登場人物が取り落とされている部分があり、たとえば『めまい』における重要な女性登場人物、ミッジについてはほとんど言及されていない。また、『めまい』の後、『めまい』を翻案した映画作品が登場したが、これらの作品における結末の改変、パロディなどについても何らかの言及があっても良かったであろう。しかし、これらの点については、将来の研究における考察を期待したい。

このように、用語の使用法や全体的な論理展開のバランスにやや不満は残るものの、ロバート・プレスラー氏の論文は、その興味深い主題について極めて精度の高い議論を展開している。今後のヒッチコック映画における翻案についての理論的分析に貢献するものとして、氏の論文を高く評価したい。

以上、博士論文の内容、最終試験における応答などから総合的に判断した結果、審査員全員一致で、この研究が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものであるとの結論に達した。